

「男、突っ走る！」

第
105
回

第一稿

作・壽倉 雅

登場人物

木内 雅也 (24)

『オフィスツリーイン』代表

門野 賢哉 (24)

元中央高校生徒

本部 明美 (23)

元名古屋カフェ調理専門学校学生

国枝 佐代子 (59)

『スリジエネ』総合プロデューサー

住吉 真由美 (42)

『スリジエネアカデミー』ダンス講師

谷岡 典江 (57)

『スリジエネアカデミー』演技講師

上島 譲治 (35)

『スリジエネアカデミー』演技講師

弘島 理絵 (28)

『スリジエネアカデミー』歌唱講師

本村 晴洗 (54)

『スリジエネアカデミー』歌唱講師

加原 美穂子 (35)

『スリジエネ』会計担当兼メンバー

北原 まひる (22)

『スリジエネ』メンバー

加原 千世 (13)

『スリジエネ』メンバー

林原 亜里沙 (12)

『スリジエネ』メンバー

赤澤 隆太 (11)

『スリジエネ』メンバー

辻松 翔 (11)

『スリジエネ』メンバー

石田 琴音 (10)

『スリジエネ』メンバー

林田 香奈枝 (10)

『スリジエネ』メンバー

磯村 秀樹 (16)

『スリジエネ』メンバー

高橋 美香 (10)

『スリジエネ』メンバー

沙耶 (12)

『スリジエネ』メンバー

1 競艇場

N 「二〇二〇年、三箇日が過ぎてすぐのこと
……」

水上を六機のボートが走っている――
アリーナで前のめりになってレースを
見ている観客たち。その中に、雅也と
賢哉の姿がある。

賢哉 「いけー！」

雅也 「よしよしよし！」

賢哉 「あー、くそー、外れた」

雅也 「え、外れた？」

賢哉 「あのカーブでキューンと行けば良かったのにな」

雅也 「惜しかったね」

賢哉 「お前も舟券買うか？」

雅也 「俺は買わない」

2 ラーメン屋

雅也と賢哉がラーメンを食べている。

雅也 「かどけんは、ずっとあそこに通ってた

んだね」

賢哉「燃えるだろ？」

雅也「確かに、自分がこれって決めた人が一位になったり、予想が当たると嬉しいもんだね」

賢哉「母親の腹ん中にいたときから、あのエンジン音聞いてたからな」

雅也「じゃあ、相変わらずいつも競艇場に通ってるんだ」

賢哉「高校の頃と比べたら、減ったさ。今はもう仕事もしてるから」

雅也「それもそうか。高校の頃は、学校帰りに行ってたんでしょ」

賢哉「ああ」

雅也「鞆の中に、競艇新聞とたばこ入れてさ。今考えたら、あんなの高校生の少年が鞆に入れてるものじゃないよね」

賢哉「タバコも、あの頃からは本数減ったぞ。ここ数年で、値上がりもすごいんだから」

雅也「そうなんだ。俺、全然吸わないから、

そういうこと分かんない」

賢哉「酒は飲むんだろ？」

雅也「うん。おかげで、この一年近くで十キ

ロも太っちゃったよ」

賢哉「十キロ？ お前が？」

雅也「一年前は五十キロだったんだけどさ、

年末健康ランドに行ったとき、お風呂とサ

ウナ入ったんだよ。で、その後、体重計乗

ったら、六十キロになっててびっくりした

よ」

賢哉「でも、そんなに見た目変わらないぞ」

雅也「（お腹を触って）ここについてるの」

賢哉「お前も、とうとうデブになったか」

雅也「デブにはなりません。かどけんも、当

時からちつとも変わってないじゃん」

賢哉「俺も太ったぞ」

雅也「これから、幸せ太りするかもね。（と

ラッピングされた袋を渡すと）はい、これ。

結婚祝い」

賢哉「おお、ありがとう」

雅也「だって、今日会うことになったのは、かどけんから正月あけおめLINEもらったときに春に結婚するって言われたから、これはすぐにでも結婚祝い渡さなきゃと思っただからで。昨日、ショッピングセンター行って慌てて買ってきたんだから」

賢哉「お前のそういうところ、昔からちつとも変わってねえわ」

雅也「え？」

賢哉「何かあったらすぐに行動するところ。」

高校のときも、そうだったじゃねえか」

雅也「いろいろ行動してたら、三年間あつという間に終わってた。もうあれから六年も経ったんだよね。ここにきて、まさかかどけんから結婚報告を聞かされるとは思わなかったけど。でも、ようやく落ち着いたんだね」

賢哉「（苦笑して）まあな。職場のラインが隣同士でさ、いろいろ話していくうちに仲良くなってる」

雅也「奥さん、一つ上だっけ？」

賢哉「ああ。でも、結構子どもっぽいところあるんだよ」

雅也「そっか」

賢哉「お前も、相手見つけろよ」

雅也「俺は、それどころじゃないもん。仕事とか、いろいろやることもあるしね」

賢哉「忙しいのが似合ってるよ、お前には」

雅也「そうそう。……ねえ、かどけん」

賢哉「……？」

雅也「幸せになってね」

賢哉「ありがとう」

笑顔で頷く雅也。

3 神宮前駅・表

雅也が待っている——乗用車がやってきて、運転席から明美が降りてくる。

明美「うっちー先輩！」

雅也「明美ちゃん！」

4 熱田神宮・境内

初詣の参拝客で混雑している。

雅也と明美が歩いている。

明美「駐車場からちよつと歩くことになりましてけど、良かったですか？」

雅也「しょうがないよ。一番近い、あそこの駐車場は年末年始特別料金で、三十分停めただけで千円取られるんだもん。それなら、ちよつと歩くぐらいどうってことないさ」

明美「まだ人結構いますね」

雅也「今日は六日でしょ。三箇所日終わっても、やっぱりまだ人は多いね」

明美「今年も、お互い仕事頑張りましょうね」

雅也「そうだね。この春で卒業から丸三年。うちの事務所も、何とかやってるよ」

明美「さすがは先輩ですよ。（と出店を見て）あ、プチカステラ食べましょうよ」

雅也「良いよ」

× × ×

おみくじを引いている雅也と明美。

明美「ゲッ……」

雅也「どうしたの？」

明美「最悪です、凶です」

雅也「うわ……不吉な予感」

明美「先輩は？」

雅也「吉だわ」

明美「可もなく不可もなくですね」

雅也「面白くないよね」

明美「まあ、しょうがないです」

×

×

×

雅也と明美が歩いている。

雅也「今日、どうしようか？」

明美「まだ全然時間ありますもんね」

雅也「どっか行く？」

明美「ショッピングセンターでも行きます

か？ ふらっとたまには買い物しましょう

よ」

雅也「うん、行こう」

5 ショッピングセンター

クレープ屋でクレープとタピオカミルク

クを食べている雅也と明美。

雅也「久しぶりに飲んだわ、タピオカミルク」

明美「先輩」

雅也「どうした？」

明美「全然タピオカ似合っていないですよ」

雅也「うるさい」

明美「やっぱり先輩は、抹茶か梅昆布茶が似

合いますよ」

雅也「明美ちゃんって、本当に俺のこと先輩

と思っけてないよね？」

明美「思っけてますよお」

雅也「思っけてますよお、じゃないよ」

明美「だって、気を使わない先輩ほどありが

たい存在っけてないじゃないですか。うちの

学科の先輩たちは、結構厳しい人ばかり

だったんで」

雅也「そうだよねえ、思えば俺と明美ちゃん

は姉妹校であっけて、同じ学校じゃないんだ

もんね」

明美「ありがたいですよ。先輩とこうして、
今でも仲良くさせてもらって」

雅也「そう思ってるなら、良いよ」

明美「今年も、いろんなところ行きましよう
ね。あ、そろそろお花見行きましようよ。」

結局行けてないですもん」

雅也「そうだね。今年の春は、ちゃんと行こ
う」

明美「約束ですよ」

雅也「うん、約束」

6 駅・ターミナル

明美が車を停める——助手席で眠って
いる雅也。

明美「先輩、駅着きましたよ」

雅也「……」

明美、スマホで雅也の寝顔を撮影する。

明美「うっちー先輩」

と、体を揺らす——目を覚ます雅也。

雅也「あれ、眠っちゃった？」

明美「爆睡してましたよ」

雅也「ごめん。何か居心地よくて眠っちゃった」

明美「そりゃ、こんなに気持ち良い寝顔してたらねえ（と写真を見せる）」

雅也「撮ったのか？」

明美「こんなの、撮ってくれて言ってるよ
うなもんじゃないですか」

雅也「次は寝ないようにする。車、出してくれて、ありがとう」

明美「いえいえ。（と耳につけたイヤリング
を見せて）これ、ありがとうございました。

大事にします」

雅也「車出してくれたお礼」

明美「ありがとうございます」

雅也「気を付けて帰ってね」

明美「はい」

雅也、車から降りる。

雅也「じゃあね」

明美「バイバイ、先輩」

と、車を出発させていく——手を振って見送る雅也。

7 住吉ダンススタジオ（一週間後）

N 「一週間後。『スリジェネアカデミー』として新体制になって最初のレッスンが始まりました」

雅也がやってくる——既にアカデミー生の小学生たちが来ている。まひる、美穂子、千世、亜里沙、亜里沙の妹・香奈枝（10）、翔がいる。

雅也「おはようございます」

まひる「うっちー、おはようございます」

美穂子「おはようございます」

雅也「美穂子さん、国枝さんから聞きました。運営として会計担当になってくださるそう
で」

美穂子「ええ。住吉先生が副代表になったでしよ、それで私にも手伝ってほしいと言われて。うっちーさんは、広報と総務全般で

すか」

雅也「はい。ひたすら、国枝さんのもとでお世話になります」

千世「うっちー、おはよ」

雅也「おはよう、千世。千世も今日からアカデミーなんだね。一緒に頑張ろう」

千世「うん」

亜里沙「うっちー」

雅也「おはよう、アリサ」

亜里沙、香苗を見ながら、

亜里沙「私の妹の香奈枝。今日から、一緒に

アカデミーやることになったの」

雅也「そう。確かに姉妹、そっくりだね。

(と香奈枝に)うっちーです、よろしく」

香奈枝「よろしくお願ひします」

翔「うっちー、りゅーたがまだ来てない」

雅也「あれ、初日から遅刻か、あいつは？」

と、隆太が入ってくる。

亜里沙「りゅーた、来たッ」

雅也が振り向くと、隆太が勢いよく抱

き着いてくる。

隆太「うっちー！」

雅也「おはよう、りゅーた（と抱きかかえる）」

× × ×

佐代子、真由美、本村、洗、演技講師

の谷岡典江、上島譲治（35）、その

妻・理絵（28）が挨拶をしている――

――体操座りで聞いている雅也、まひる、

美穂子、千世、亜里沙、香奈枝、隆太、

翔、新規『スリジェネ』メンバーの石

田琴音（10）、磯村秀樹（16）、

稲本美香（10）、高橋沙耶（12）。

佐代子「皆さん、おはようございます」

一同「おはようございます」

佐代子「新年が明けて、二〇二〇年が始まりました。今日から『スリジェネ』も新たに

『スリジェネアカデミー』として活動をスタートすることになりました。今日は一回目なので、講師の先生の皆さんをご紹介します

ます。まず私、映像企画など主にメディア
レッスンを担当します、代表の国枝佐代子
です。よろしく願います」

住吉「ダンスレッスンを担当します、副代表
の住吉真由美です、よろしく願います」
本村「歌唱レッスンの基礎クラスを担当しま
す、本村晴臣です。よろしく願います」

洗「歌唱レッスンの応用クラスを担当します、
弘田洗です。『神様が願うまで』に続いて、
こちらでお世話になります。よろしく願
います」

谷岡「演技レッスン基礎を担当します、谷岡
典江です。皆さん、よろしく願います」
譲治「演技レッスン応用クラスを担当します。
上島譲治と言います。皆さんにぜひ芝居の
楽しさを伝えられたらと思います。よろしく
願います。（と理絵を見ながら）それ
から、アシスタントをする妻の理絵です」
理絵「理絵です、よろしく願います」
谷岡「ちなみに私の娘です」

佐代子「では、続いてはメンバーたちの自己紹介の時間にしたいと思います。(と雅也に) うっちは最後ね」

雅也「嘘でしょうお」

佐代子「リーダーは最後に決まってるじゃない。(と美穂子に) では美穂子さんから」
美穂子「はい。(と起立すると) 『スリジェネアカデミー』の会計担当及びメンバーとしてお世話になります、加原美穂子です。よろしくお願いします」

千世「(起立して) 加原千世です、中学一年生です。普段は住吉先生のもとでダンスを教わっています。よろしくお願いします」

亜里沙「(起立して) 林亜里沙です、小学六年生です。楽しくやっけていきたいです、よろしくお願いします」

香奈枝「(起立して) 亜里沙の妹の林香奈枝です、小学四年生です。初めてなので、頑張りたいと思います。よろしくお願いします」

翔「（起立して）辻松翔、小学五年生です。

演技は『神様が願うまで』が初めてでした。
これからたくさん頑張りたいと思います、
よろしくお願いします」

隆太「（起立して）赤澤隆太です！ 小学五年生です！ 元気に楽しく頑張ります、よろしくお願いします！」

琴音「（起立して）石田琴音です。小学四年生です。合唱団をやっています。ダンスや演技も上手くなりたいと思って、入りました。
よろしくお願いします」

秀樹「（起立して）磯村秀樹です。高校一年生です。高校では演劇部に入っています。
これから楽しくやっていけたらと思います。
よろしくお願いします」

美香「（起立して）稲本美香、小学四年生です。歌が大好きです、よろしくお願いします」

沙耶「（起立して）小学六年生、高橋沙耶です。保育園の頃からバレエをやってきました。

演技や歌は初めてですが、楽しくやっていた
きたいと思います。よろしくお願いします」
まひる「北まひるです。大学四年生です。三
味線やってます。よろしくお願いします」

佐代子「はい、最後にうっちー」

雅也「そういうプレッシャー与えないでくだ
さいよ。（起立して）はい、気持ちは永遠
の十八歳、『スリジェネ』唯一の一期生メ
ンバー木内雅也、二十四歳です。『スリジ
ェネ』一筋で、これからもたくさん皆さん
と一緒に活動していきたいと思えます。よ
ろしくお願いします！」

拍手をする一同。

× × ×

住吉に合わせて、ダンスの基礎体操を
しているメンバーたち。

住吉「はい、ワンツースリーフォー、ファイ
ブシックスセブンエイト」

× × ×

台本の回し読みをしている一同——随

所で指導をしている谷岡。

N 「これまでの『スリジェネ』とは違い、基礎からしっかりと学ぶレッスンは、僕にとっては刺激的な時間でした」

8 中央公民館・エントランス

谷岡、譲治、理絵が待っている——雅也がやってくる。

雅也 「お疲れ様です」

谷岡 「うちー、お疲れ」

雅也 「先ほどはレッスンの時なので、あまりゆっくりお話できませんでしたが、『七夕物語』の時は、牛のメイクで本当にお世話になりました」

谷岡 「あの時のうちーは、初々しかったね」

譲治 「ああ、あの牛やってた子？」

雅也 「はい。もしかして、譲治先生……」

譲治 「うん、ヤマから宣伝もらって、見に行っただよ」

理絵 「私も見に行ったわよ。全然気づかなか

った」

雅也「まあ、あの時は牛のメイクもしてましたし、ツノ被ってましたからね」

谷岡「今日の、台本の読み合わせ、やっぱりうちーは上手かったよ」

讓治「ヤマから聞いたけど、うちー脚本も書いてるんだって？」

雅也「最近は、全然書いてないんですけどね」

讓治「やっぱりホンが書ける人は、イメージとかテンポがあるから、初見の台本でもスラスラ読めるんじゃないかな」

理絵「それはあるかも。でもさ、演技初めての子もいるけど、みんな比較的上手いほうだよ」

讓治「芝居に興味がある子たちばかりなんだろう」

谷岡「教え甲斐があるじゃない。これでみんなが上手くなれば、みんなで舞台に立てるだろうし」

雅也「あ、会議室の鍵、もらってきますね」

9 同・会議室

雅也、佐代子、住吉、本村、洗、美穂子、谷岡、譲治、理絵が会議をしている。――雅也、手帳にメモを取っている。

佐代子「講師の先生方、初回レッスンお疲れさまでした。今後のスケジュールについて、それから年間の計画について、私から説明します……」

N「変わらず僕は、会議においては書記であり、メンバー兼運営という立ち位置で意見を言うことになりました。この『スリジェネ』での活動を、これからもライフワークにしていこうと思ったのでした」

つづく